



# 山崎正和著作集



## 戯曲(1)

中央公論社

山崎正和著作集 1

定価三二〇〇円

昭和五十七年三月十日印刷  
昭和五十七年三月二十日発行

著者 山崎正和

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七  
振替東京二一三四  
©一九八二 検印廃止

山崎正和著作集 1 目次

凍 いど 蝶 ちよう 喜劇一幕

3

吳王夫差 三幕六場

61

カルタの城 三幕四場

157

世阿彌 四幕とエピソード

251

動物園作戦 四幕六場

345

編集覚書 441

書誌 444

山崎正和著作集  
1 戯曲(1)



凍いて

蝶ちよう

喜劇一幕



人物

漢城由禾子。漢城家の長女。

漢城由梨子。由禾の妹。漢城家の当主。

漢城恭一。漢城家の養子。由梨の夫。

須賀祐吉。一同の旧友。医師。

漢城家の居間兼応接室、先代の権勢を思はせる重厚な造作が漸々古びて、そこに一つの「生活」が行なはれてゐることを示す。正面の窓を背にしてカギの手のソファー、クッションが二つ三つ。その手前に丸テーブル、テーブルを囲んで椅子が二脚。窓に並んで上手に中庭に通じるフレンチドア。さらに部屋の手隅には書棚（少数の洋書、百科辞典、法律・経済書など）。壁には神経質さうな老人の肖像画、その下に台があつて卓上電話。壁にはこの外二、三箇所、額を掛けたあとが白くなって残つてゐる。壁紙は茶色っぽくなつた黄色。カーテンだけが新しい明るい色。その他敷物、ガス・ストーヴ、古びたシャンデリア、サイドテーブル（洋酒とお茶の準備）、飾り棚など適当に。ともかく厳しく潔癖な室内装飾といふよりは、後からごたごたと道具類を持ち込んで日常の必要に甘えてしまつたといった感じ。下手に奥の間へ通じるドア。上手に玄関へ通じるドア。ドアと並んでロッカーが一つ。

東京に近い小都市の住宅街の一隅、時は春である。生暖い夜。ソファーに向かつて左から由禾子、由梨子、その右の椅子に恭一、その隣の由禾子と向かひあふ位置に須賀。四人はそれぞれスリッパをつっかけてゐる。幕があがると四人は賑やかな由梨子を中心にカードをやつてゐる。華やいた笑ひだが、何か不都合なことを隠して、それを消さうと意識してゐる華やき。一同の感情の起伏が、常に似ず大きい。

男達と由梨の笑ひ声。

須賀 どうも驚いたもんだねえ。まさかほんとにできてたあ思はなかった……

恭一 由梨はいつだってかうなんだ。どの回にも賑やかに騒ぐもんだから、また下手なブラッフだとか  
をくくつてゐるとすぐこれだ。いきなりロイヤルストレートと来る。

由梨 あら、でもさっきだってストレートフラッシュだったぢゃないの、あたくし。

須賀 だってあんたはのべつ幕なしなんだからな。騒ぐんだよ、できたできたって。ポーカーフェイスな  
んてものぢゃないんだ。その下手くそなブラッフに、逆にこっちがのせられる。

由梨 嬉しいわ、嬉しいわ。ね、お姉様、点数勘定なすってよ。あたくしきつと総合点で勝っててよ。ね、  
お姉様、三〇〇〇はあるでしょ。

由禾 (膝の上のノートを見る) さう、恭一さんがプラスの一〇点。

恭一 それでもプラス点があるだけでした。

由禾 わたくしがプラス五〇〇点。

由梨 さうなのよ。お姉様といふ方はいつでも、さう……

由禾 由梨ちゃんがプラス二六〇〇点。

須賀 それで結局僕が……

由禾 マイナス三一一〇点背負ひ込んでおしまひになつたといふことね。

須賀 ひどいことになつたものだね。一点五十銭だから千五百円ですかい？ あんまり貧しき医者をいぢ  
めるものぢゃありませんぜ、皆さん。

由梨 ああら、貧しき医者が聞いたら呆れますわよ。あなたなんぞ一寸キューレットを動かしてお掃除を  
なさるだけで、世の中のか弱き頼りのない女性達からたんまり……

恭一 ふん。やられたね。(須賀を見る)

須賀 あんまりからかっていただきたくないね。僕は君達なんぞと違って一日坐って喰ってる手合ひとはわけが違ふんだから。よろしい、由梨君、そいぢや君と一騎打ちをやらう。有閑マダムオキエビオンの代表者としての君とね。一点を一円に値上げして三回勝負だ。どうです？ ええ？

由梨 結構ですわ。よくなってよ。

須賀 強気だね。ようし……

須賀札を切つて恭一に渡す。恭一念入りに切つて更に由梨に渡し、この間に会話。

須賀 いや、しかし今日はお招きをどうも有難う。漢城夫妻と由禾さんの御健康を祈つて一つ乾杯しよう。

由梨 おやおや、大変お行儀のおよろしいこと。もう二十年から毎週のやうに遊びにいらしてて、宅でさ

ういふ御挨拶承るの、今日が始めてぢやないのかしら……ね、さうぢやなくて、お姉様？

由禾 さうね。由梨ちゃん用心なさいよ。あなた油断させられてるのかも知れないわ。

須賀 いやだね。そんなわけぢやない。しかし二十年たつうちには往年の不良青年も不良ながらに老年になつてね、それなりに挨拶の一つも心得るやうになるさ。いやとにかく、御夫妻、ならびに由禾さん

に乾杯！

恭一 何だ、やに御夫妻を連発するぢやないか。さては君の独身主義も若干かびの匂ひがするやうになつたといふことか。まあいい。乾杯するならわれわれのためぢやなく娘のために乾杯してくれ。では

……(四人飲む)

須賀 ひとが礼儀を厚くしてる時に、いささかかんに障るやうなことをいったやうだが、ま、いいことしよう。君は今夜は、気の毒な父親なんだからな。

恭一 気の毒な父親か。全くね。

須賀 毎日娘のためにせっせと稼いで、挙句の果てがこれではな。いやお気の毒に。

恭一 実際、この頃の娘にゃ手を焼くよ。

須賀 勢ひひとの独身暮らしが羨しくもあり、妬ましくもあり、か。深く御同情申しあげますさ。

由梨 あたくしの方は同情なすって下さいませんの。

須賀 どう致しまして、奥様。心から……

由梨 いや。さういふ風にすぐ冗談になさってしまったふの。ほかのことならいいけど今夜は、あたくし共夫婦にとつては、何だか、悪くからかはれてるみたいで。

須賀 それは失礼。僕はいつの間にか悪い癖がついたやうで……永いおつきあひといふものの、やっぱりあなた方とは違ふ。育ちは争はれませんか。

由梨 ですから、さういふおっしゃり方が厭なのよ。

須賀 おやおや、それはどうも……とここで、その、冴子君は……山登りったけど、どこへ登ったの？

恭一 黒部の奥の何とかいったな。この人が知ってる。大体僕は何も知らない間に出て行ったんだから。  
(煙草に火をつける)

由梨 また、そんなにおっしゃって。それあ責任逃れですわ。

恭一 だって、さうなんだから仕方がない。冴子の奴、僕が出てる間にこの人を口説いて、無理矢理行ってしまったらしい。

由梨 あたくしだつてとめたのよ。ね、須賀さん、春の登山って危いんでせう。

恭一 変な友達があるんだらう。実際、この頃の若い娘なんて何をやるんだか、気が知れない。

須賀 だが登山は海と違って精神的なものだぜ。それに春山ってのは、登山家には、危いところが一種のやり甲斐らしいからね。

恭一 よしてくれ。あいつはまだ三度目だよ。去年の夏と、この冬と。登山家てなものぢゃない。浮かされてるんだ。

由梨 本当に、とめたんですけど。

須賀 危いから止せってのは、利き目がなくてせう？ そこがやり甲斐なんだ。

由梨 その上、今日はあの子のお誕生なのだし……かうやって皆でお祝ひもするんだから、おうちにいらっしやいっていふんですけど、ききませんの。とうとうこんなあの子のゐないお誕生会ってことになつちまって……ねえ、大丈夫かしら……ね、あたくし何だか気になるわ、いやねえ。あの子にはあたくしやせてしまふ。

恭一 (声を改めて) ですから僕は、とめて下さるやうにあんたにいつといたぢゃありませんか？ 春は素人にはむりなんだ、実際。

由梨 あなたはそんなことおっしゃるけど、そいぢゃ御自分であの子にいけないっておっしゃればいいぢやないの？

恭一 私には私の仕事ってものもある。さうさう娘に……

由梨 ですからどうしたってあたくし一人ではあの子を教育すんのは無理よ。あたくしはとめたんですもの、お父様がおるすだからいけませんって。

恭一 それや僕はあんたを信頼してる。

由梨 あの子はあたくしには駄目なのよ。ほんと。それに……(ちらと由禾を見る)

恭一 それに？ (一瞬の沈黙)

由禾 (申し訳なささうに) わたくしが、いいと申しました。

恭一 (驚いて) どうしてあなたが？ それは一体どういふことです。大体お姉さんはあれの教育にタッ

チしていただきたくないんだ。

須賀 いやいや。どうも僕がまづいことをいひ出したやうだな。しかしあんた方もさうすぐむきになって、大問題にしてしまはなくてもよさうなもんだが……

恭一 いや、さうは行かない。お姉さん、一体どういふわけであなたが。いや、なぜ危いことが分つてゐるのに、お許しになつたんです。(煙草を消す)

由禾 なぜってこともありませんわ。ただわたくしには分るのです。あの子がただのおねだりをしてゐるのか、それとも、どうしても本当にやりたいと希つてゐるのか。ときどき、心からどうしてもやめてはいけないと信じてゐる時があるのよ、あの子には。

恭一 わけの分らないことをおっしゃつては困る。そんなあなたの趣味みたいなもので、私の娘を。

由禾 趣味ではありませんわ。そのほかは考へられなかつただけ。あの子が本当に行きたい、行かねばならないと信じてゐるのが分つたのですから。

恭一 たくさんです。大体あなたは、私の娘の教育には触れていただきたくない。

切迫した雰囲気。

由梨 (少しヒステリックに) あなた。あなたにはさういふ口をおききになる資格はなくなつてよ。お考へになつてよ。そんな資格があつて?

須賀 (わざとらしく笑つて) はは、だから恭一君、あんまりひとの独身主義をからかつたりするもんじゃないよ。小糠三合持つたら養子にゃ行くなつていふからな。それに由梨君も家つき娘をさうむきつけに出すものぢゃないよ。見つともないぜ。

恭一 (吐き出すやうに) 場違ひの冗談をいって、フルをつとめるのあよせ。

由梨 第一あたくしの申しあげてるのはそんな養子だの家つきだのってことぢゃありません。本当にあなたはさういふことをよくおっしゃれてよ。

恭一 何です、開き直って。

由梨 白ばくれないですよ。今日はあの子の誕生日よ。十七年前の今日のことを、あなたは想ひ浮かべても下さらないの？ この十七年間あたくし達のこんな妙な生活がどうして始まったのか、お忘れにならないで欲しいものだわ。

恭一 (慚然として) またそれか。結局落ちつくところはそれなんだな。

由梨 またそれかとおっしゃるの。またそれよ。ええ、いつでもそれよ。あたくしはあの子を教育するなんてことできやしない。あの子の前に立つと後ろめたさでいっぱいになるわ。あなたはどうか？ 私の娘とおっしゃったわね。そのあなたの娘の前で……あなたはあたくし達のこと、このお姉様のこと、みんなの関係を説明おできになって？

由禾 よしませう由梨ちゃん。あなたはもう何度もそれを繰り返したわ。恭一さんを責めても駄目よ。それにあの子だって、あなたにばかり押しつけたり背負はしたりしやしないわ。

由梨 お姉さんは平気なの？ さう、あなたは共犯者だもの。あたくしはあの子に対して恥づかしいわ。あたくしはあの子の眼がまともに見られないの。

由禾 共犯って何のことだかわからないけど。でもわたくしはあの子の眼をまともに見るわよ。するとあの子が願ってゐることが本心に心の底からのものかどうか分るんだわ。

由梨 どういふことなんでせう。呆れたわ。さういふお姉様が傍にいらっしゃるものだから、あの子がますますエキセントリックになるんだ。

由禾 あなたはそれがおっしゃりたかったのね。さう、結局わたくしがこの家にゐるってことがいけない



わ。(決して皮肉ではなく優しく) あなたは複雑なことは嫌ひなんだし、それにわたくしって存在はどうしても複雑なことなんですもの。でもわたくしがここにゐるやうに強く契めて下すつたのは……やっぱりあなたなのよ。

由梨 それは……それはお姉様がいらして下さらなくちゃ、あの子があたくしにはどうにも手に余るからよ。あの子はお姉様のおっしゃることしか聞かないんですもの。あたくしがあの子を恐れて、あの子を避けてゐるうちに、お姉様はさっさとあの子の手を引っぱって、あたくしなんか手も届かない遠いところへつれてっておしまひになつたのね。

由禾 わたくしは何もそんな……

須賀 僕あね。由梨君て人はもつとさっくり割り切れてる人だと思つてた。適当に子供の教育などは暇な老嬢オールドミスに押しつけておいてだ。自分は生活の中のもつと愉快な部分に活路を見出す、明るい生活派だと思つてたよ。案外なもんだね。

恭一 僕もあなたがそんなにあの子に一所懸命だとは思へなかつたが……

由梨 お分りになつてないんだわ。どなたもあたくしを理解して下すつてないのね。あたくしはあの子なしには生きられないのよ。第一須賀さんは、あなたは生活派だとおっしゃるけど、ここには生活なんてあつて？ あたくしとこの恭一とは、この三百坪の家でお父様の遺産の番人をしてるだけぢゃありませんか？ こんなものみんな売り払つてアパート住ひがしたかったのに、お父様の体面を傷つけないためにはそんなこともできやしないし……

恭一 自分達のことをそんな風にいふのは感心しないね。悪い癖だ。

須賀 君はなんだな。ロシアの小説本かなんか読みすぎたんぢゃないか？ ここには生活がありません、なんてのは一世紀前の露助の貴族のせりふだぜ。たかだか家を一軒遺産に貰つた日本のブチ・ブルの